

## 青年期における恋愛と同性友人関係ならびにアイデンティティとの関連

武井 しづ葉・島谷 まき子

### Correlations among romantic love, same-sex friendship, and identity in adolescence

Shizuha TAKEI and Makiko SHIMATANI

This study examined correlations among romantic love, same-sex friendships, and identity, including gender differences in adolescence. We administered a questionnaire consisting of the questions about romantic love situations, The Same-Sex Friendship Scale (Ochiai, 1998), and the Multidimensional Ego Identity Scale (Tani, 2001) to participants ( $N=83$ ; 210 men, 273 women, mean age = 20.47 years). After classifying them into five groups; longing for romantic love, desiring romantic love (with dating experience), desiring romantic love (without dating experience), not desiring romantic love (with dating experience), and not desiring romantic love (without dating experience). A two-way analysis of variance (five groups x two sexes) on the Same-Sex Friendship Scale and the Multidimensional Ego Identity Scale Scores as dependent variables. The results indicated that same-sex friendships and the degree of identity establishment affected desiring for romantic love and having dating experiences in males more strongly than females. These results support gender differences in the correlation between the degree of identity establishment and intimacy achievement in adolescence (Erikson, 1968).

*Key words* : *romantic love in adolescence* (青年期における恋愛), *same-sex friendship* (同性友人関係)  
*identity* (アイデンティティ)

#### 問題と目的

##### 問題

Erikson (1963 杉村 訳 1998) によるアイデンティティとは、幼児期以来に形成されてきたさまざまな同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性・連続性を持った自我の確立の状態である。アイデンティティは、自己の内面への強い関心とライフサイクルの各段階における重要な他者との関わりを通して形成されていき、その対象は、親、家族、仲間、パートナーへと移行していく (Erikson, 1959 松下・吉田 訳 2009)。アイデンティティ形成とは、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者との視点の食い違いを相互調整によって解決する作業である (杉村, 1998)。つまり、青年にとっての重要な

他者の存在がアイデンティティの形成を支える要因であることが示唆される。青年期の対人関係の中心は親子関係から友人関係へと移行していき、青年は友人関係を築く中で自己を見出していく (松下・吉田, 2007)。すなわち、青年期における重要な他者として友人があげられ、アイデンティティ形成は、友人との関係性によって影響を受けると考えられる。また、Eriksonの漸成発達理論によると、青年期は「アイデンティティの確立対 アイデンティティ拡散」、成人期初期は「親密性対 孤立」という発達主題があるとされている (高坂, 2016)。Erikson (1959 ; 2011 高坂 訳 2016) は親密性について、「適切なアイデンティティの確立がされて初めて、異性との本当の親密さ (正確には、あらゆる他人との親密さ、さらには自分との親密さ) が可能になる」と述べている。Erikson (1968 高橋 訳 1990) は、男子はアイデン

ティティの危機の解決後に親密性の危機に対処するが、女子はアイデンティティの危機と親密性の危機の解決が並行していると仮説している。高橋(1990)は、アイデンティティと親密性の関連を検討した先行研究をまとめ、アイデンティティの危機解決は、成熟した親密性の達成と関係し、この関係は女子よりも男子において顕著であることを報告している。つまり、青年期のアイデンティティの形成において、親密性の要因は男性の方が女性よりも強く関連することが考えられ、親密性は男性と女性ではアイデンティティに異なる影響を与えると考えられる。Erikson (1959 ; 2011 高坂訳 2016) の親密性の説明を考慮すると、青年期において親密性を築く関係性の対象は、恋人であると考えられる。したがって、本研究では、青年期におけるアイデンティティ形成に重要な役割を果たす関係性として、恋愛関係および同性友人関係を取り上げて検討する。

青年期の恋愛関係についての知見は、恋人がいる青年を対象に行った研究が多い一方、恋愛を必要とっていない青年や交際経験のない青年の存在が少数派ではないことも報告されている(内閣府, 2015)。しかし、恋人がいない青年や交際経験のない青年を対象とした研究は、恋人がいる青年を対象に行った研究よりも少ない。天谷(2007)は、恋人あり群、恋人なし恋愛経験あり群、恋愛経験なし群の3群における恋愛観と信頼感を比較し、恋愛経験や恋人の存在は交際相手との心理的距離を縮め恋愛を遊びと捉える傾向を減少させること、交際経験を通して自分や他者に対する信頼感を高める傾向があることを報告している。また飛田(1989)では、男性は恋愛群の自尊心得点が最も高く、続いて失恋群、未経験群となっているのに対して、女性は未経験群の自尊心得点が最も高く群間の差は小さいことが示された。つまり、男性の方が女性よりも交際経験を通して自分自身のことを肯定的に認められる傾向が高いことが示唆される。高坂(2011)は、アイデンティティの「心理社会的同一性」得点において、男性のみで恋愛群、恋愛希求群、恋愛不要群の群間差がみられたことから、青年のアイデンティティの発達に対して、男性の方が女性よりも恋人の存在が大きな意味をもつと推察している。一方、川本(2015)では、交際経験の有無がアイデンティティに及ぼ

す影響について検討し、交際経験がある青年の方が交際経験がない青年よりも、アイデンティティの「対自的同一性」と「心理社会的同一性」の確立が高いことが示されている。つまり、恋愛経験のある青年とない青年とでは、アイデンティティの形成に差異がみられる可能性が考えられ、さらに、男性と女性では恋愛関係から受ける影響が異なることが示唆されている。

青年期の同性友人とのつきあい方については、発達的な変化がみられる。中学生から大学生へと発達するにつれて減少する同性友人とのつきあい方は「みんなと同じようにするつきあい方」であり、逆に増加するつきあい方は「自己を開示し積極的に理解しようとするつきあい方」である(落合・佐藤, 1996)。このような友人関係の発達的な変化には、年齢とともにアイデンティティの確立がなされていくことが関連していると考えられる。友人関係とアイデンティティの関連については、アイデンティティの確立の程度が高い青年は友人と積極的に深い関係性を築こうとする傾向があることに対し、アイデンティティの確立の程度が低い青年は友人と同調的なつきあい方や関係を回避するようなつきあい方をすることが明らかにされている(安井・谷, 2008 ; 松下・吉田, 2009 ; 堀岡, 2010)。つまり、アイデンティティの確立の程度と友人とのつきあい方は相互に関連すると考えられる。さらに、対人的構えについても性差がみられることが示唆されている。佐藤(1993)の研究において、女性は男性よりも、親以外の愛着対象に対して安心感を抱いており、人間関係に対する信頼感が高いことが示されている。一方、男性は女性よりも、親以外の愛着対象に対して親密な関わりを拒否する傾向があり、人間関係に対する信頼感は低いことが示されている。つまり、男性と女性では愛着対象の捉え方や他者に対する信頼感が異なり、女性の方が男性よりも対人関係全般に親密な関係を築いていると考えられる。

青年期の同性友人とのつきあい方と恋愛のあり方の関連について、多川(2003)は、恋人が愛着対象としての機能を果たすことで精神的安定がもたらされ、それを基盤として友人に対して余裕をもって接することができる影響が見られると示唆している。つまり、恋愛関係を築くことで親密性が獲得されると、友人と安定的な関わりが持てる

ようになると考えられる。高坂 (2018) では、恋愛に対して消極的な青年や、恋人を欲しいと思わない青年に着目して、「恋愛群」、「恋愛希求群」、「恋愛不要理由別 4 型 (ひきずり型、楽観予期型、自信なし型、積極的回避型)」の 6 群に分け、各群の同性友人とのつきあい方について検討し、恋愛のあり方の違いによって同性友人とのつきあい方が異なることが明らかにされている。しかし、高坂 (2018) の研究においては、交際経験の有無の違いによる同性友人とのつきあい方の差異については検討されていない。川本 (2015) では、同性友人関係に対するアタッチメント・スタイルがアイデンティティに及ぼす影響について、交際経験の有無に着目して検討した結果、交際経験の有無によって、同性友人に対するアタッチメント・スタイルがアイデンティティに異なる影響を示すことが明らかになった。この結果より、交際経験の有無によって同性友人のつきあい方も異なることが考えられる。さらに、恋愛関係は男性と女性では異なる機能を果たすことが示されている。大坊 (1988b) では、男性は別れを経験した者の方が、対人的に積極的で、他人への関心が強く、親和欲求も高く、自立的な欲求も強いことが示されているが、女性についてはそのような結果はみられていない。そこで、本研究では、恋愛のあり方の違いとして、交際経験の有無についても取り上げ、同性友人とのつきあい方が異なるかどうかについて性差も含めて検討を行う。

## 目的

先行研究では、恋愛のあり方の違いによって同性友人とのつきあい方が異なることは示唆されているが、それがアイデンティティとどのように関連するののかについては検討されていない。また、交際経験の有無による同性友人のつきあい方がアイデンティティとどのように関連するののかについても検討されていない。したがって、本研究では、恋愛群、恋愛希求群 (交際経験あり)、恋愛希求群 (交際経験なし)、恋愛不要群 (交際経験あり)、恋愛不要群 (交際経験なし) の 5 群を設定し、青年期における恋愛希求と交際経験の有無および同性友人関係がアイデンティティとどのような関連がみられるか検討することを目的とする。恋愛のあり方によって同性友人とのつきあい方が

異なり、アイデンティティとどのように関連するのかが明らかになれば、青年期におけるアイデンティティ形成について理解するための一助になると考えられる。なお、恋愛による影響は男性の方が女性よりも強いとされていることを踏まえ、本研究の目的を検討するため、先行研究 (高坂, 2011; 高坂, 2018; 飛田, 1989; 高橋, 1990; 川本, 2015; 大坊, 1988b; 天谷, 2007; 佐藤, 1993; 堀岡, 2010) より、以下の仮説を立てる。**仮説 1:** 男性の恋愛群は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「積極的相互理解」が高く、「防衛的」は低く、アイデンティティの確立の程度も高い。**仮説 2:** 男性の恋愛希求群 (交際経験あり) は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「全方向的」、「被愛願望」、「積極的相互理解」が高く、アイデンティティの確立の程度は恋愛不要群よりも高い。**仮説 3:** 男性の恋愛希求群 (交際経験なし) は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が高く、アイデンティティの「対自的同一性」、「心理社会的同一性」は低い。**仮説 4:** 男性の恋愛不要群 (交際経験あり) は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「同調的」「全方向的」「被愛願望」「積極的相互理解」が低く、アイデンティティの確立の程度は恋愛群および恋愛希求群 (交際経験あり) よりも低い。**仮説 5:** 男性の恋愛不要群 (交際経験なし) は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」、「積極的相互理解」、「全方向的」、「自己自信」が低く、同性友人とのつきあい方の「防衛的」が高く、アイデンティティの確立の程度も低い。**仮説 6:** 女性の恋愛 5 群において、同性友人とのつきあい方とアイデンティティの確立の程度に群間差はみられない。**仮説 7:** 交際経験がある群においては、男性は女性よりも同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「積極的相互理解」は高く、アイデンティティの確立の程度も高い。一方、交際経験がない群においては、女性は男性よりも同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「積極的相互理解」は高く、アイデンティティの確立の程度も高い。

## 方法

### 調査協力者と調査時期

2020年6月から10月の期間に634名に配布し、

18歳から24歳の男女の483名（男性210名，女性273名）を有効回答者とした（回収率76.18%）。有効回答者の平均年齢は20.47歳（SD = 2.04，不明1名）であった。

### 調査手続き

自記入形式の調査をウェブ上（GoogleフォームおよびSurveroid）で実施した。Googleフォームによる調査は、GoogleフォームのURLを調査協力者に配布した。Surveroidによる調査は、「アンとケイト」の登録者に配布した。

### 倫理的配慮

調査にあたっては、昭和女子大学学長・倫理審査委員会にて承認を得た（承認番号20-01）。倫理的配慮として、調査開始時に、第1に、調査への回答をもって研究協力に同意したとみなすこと、第2に、調査への協力は自由意志で決められること、第3に、回答の途中でも自由に放棄することができ、それによる不利益は生じないこと、第4に、個人が特定されることはないこと、第5に、調査結果は厳重に管理され、研究終了後は電子データの消去を行うこと、第6に、研究結果は学術誌等で公表される場合があるが回答をそのまま公開することはないこと、第7に、調査結果の要約を希望すれば知ることができること、第8に、不明な点を研究実施者の連絡先に問い合わせることができることを明記した。調査において、回答者の個人情報（メールアドレス等）を記入する欄は設けていないため、個人情報は入手できないようになっていた。

### 調査内容

(1) フェイスシート 回答者の年齢、性別、恋人の有無について尋ねた。恋人がいる者に対しては交際期間、恋人がいない者に対しては恋人が欲しいか欲しくないか、ならびに交際経験の有無の記入を求めた。

(2) 同性友人とのつきあい方尺度（落合，1998） 同性友人関係を測定するために、落合（1998）の同性友人とのつきあい方尺度の18項目を用いた。本尺度は、本音を出さない自己防衛的な「防衛的」、友だちと同じようにしようとする「同調的」、できるだけ多くの人と仲良くしていきたい

「全方向的」、自分が理解され好かれ愛されたい「被愛願望」、自分に自信をもって友だちとつきあう「自己自信」、自分を出し積極的に相互理解をしようとする「積極的相互理解」で構成されている。「以下の各項目は、あなたの“同性の友だち”とのつきあいに対する考え方やつきあい方に、どの程度あてはまりますか。最も当てはまる数字を1つ選択して下さい。」と教示し、5件法で回答を求めた。

(3) 多次元自我同一性尺度（谷，2001） アイデンティティを測定するために、谷（2001）の多次元自我同一性尺度の20項目を用いた。本尺度は、自分が自分であるという一貫性と時間的連続性を持つ「自己斉一性・連続性」、他者からみられている自分が本来の自分と一致している「対他的同一性」、自分が目指すべきものの望んでいるものが明確に意識されている「対自的同一性」、現実の社会の中で自分自身を意味づけ自分と社会を適応的に結びつける「心理社会的同一性」で構成されている。「以下の項目について、それぞれ現在の自分に最も当てはまる数字を1つ選択して下さい」と教示し、7件法で回答を求めた。

## 結果

### 同性友人とのつきあい方尺度の因子構造

各項目の床効果および天井効果はなかったため、18項目で最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量が.40を下回った3項目を削除し再度因子分析を行った。最終的な因子分析結果と因子間相関をTable 1に示す。第1因子は、落合（1998）の同性友人とのつきあい方尺度の「被愛願望」と「全方向的」の項目が混合した、皆と楽しく仲良くし皆から好かれたいつきあい方で構成されているため、因子負荷量の高い既存の因子名を採択し「被愛願望」と命名した。第2因子は、落合（1998）の「自己自信」と同一項目の自分に自信をもってつきあっているつきあい方で構成されているため、「自己自信」と命名した。第3因子は、落合（1998）の「積極的相互理解」と同一項目の積極的に相互理解をしようとするつきあい方で構成されているため、「積極的相互理解」と命名した。第4因子は、落合（1998）の「防衛的」と同一項目の本音を出さない自己防

Table 1 同性友人とのつきあい方尺度の因子分析結果と因子間相関

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
因子 I 被愛願望 ( $\alpha = .85$ )				
友だちみんなから愛されたい	.82	-.06	.02	-.02
みんなに好かれていたい	.79	-.09	.02	.06
どんな友だちとも仲良しでいたい	.70	.04	-.08	.03
どんな友だちとも楽しくつきあいたい	.68	.05	.03	.01
多くの友だちに自分のことを理解してもらいたい	.65	-.01	.06	-.05
どんな人とも仲良くしようと思う	.56	.11	-.05	-.01
因子 II 自己自信 ( $\alpha = .78$ )				
友だちと意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える	.03	.79	.00	-.07
友だちと意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない	.01	.76	.00	.06
友だちと本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまうことはない	-.01	.66	.02	.04
因子 III 積極的相互理解 ( $\alpha = .77$ )				
友だちと本音をいい合うことで、傷ついてもしかたない	-.06	.00	.87	.04
友だちと分かり合おうとして傷ついてもしかたないと思う	.02	-.04	.72	.04
友だちと本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない	.05	.10	.56	-.10
因子 IV 防衛的 ( $\alpha = .74$ )				
友だちにはありのままの自分は出せない	-.05	.04	.00	.81
友だちと本音で話すのは避けている	-.01	-.04	-.02	.73
友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である	.08	.04	.04	.58
	因子間相関	因子 II	因子 III	因子 IV
因子 I		.00	.17	.03
因子 II			.50	-.24
因子 III				-.14

衛的なつきあい方で構成されているため、「防衛的」と命名した。各因子のクロンバックの $\alpha$ 係数は、第1因子が.85、第2因子が.78、第3因子が.77、第4因子が.74であり、高い信頼性が得られた。

#### 多次元自我同一性尺度の因子構造

各項目の床効果および天井効果はなかった。20項目で最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、他の因子負荷量にまたがって因子負荷量の高い項目および因子負荷量が.40以下の項目を削除し、スクリープロットを参考に因子数を4に固定し、再度因子分析を行った。最終的な因子分析結果をTable 2に示す。各因子構造については先行研究と同一の項目で構成されていたため、先行研究に倣い、第1因子は「自己斉一性・連続性」、第2因子は「対他的同一性」、第3因子は「対他的同一性」、第4因子は「心理社会的同一性」と命名した。各項目のクロンバックの $\alpha$ 係数

は、第1因子が.88、第2因子が.85、第3因子が.86、第4因子が.68であった。第1因子、第2因子、第3因子は高い信頼性が得られた。第4因子の $\alpha$ 係数は他の因子よりも若干低い値であるが、アイデンティティの概念として重要な側面であると考えられるため、採択した。

#### 各尺度の性差

各尺度の男女別平均値と標準偏差ならびに対応のない $t$ 検定の結果を示す(Table 3)。同性友人とのつきあい方尺度では、「被愛願望」( $t(481) = -1.03, n.s.$ )、「積極的相互理解」( $t(479) = 1.54, n.s.$ )、「防衛的」( $t(481) = -1.70, n.s.$ )は有意な性差はみられず、「自己自信」は男性の方が女性よりも得点が有意に高かった( $t(481) = 2.76, p < .01$ )。多次元自我同一性尺度では、「自己斉一性・連続性」( $t(481) = 1.76, n.s.$ )、「対他的同一性」( $t(481) = .96, n.s.$ )、「対自的同一性」( $t(480) = .96, n.s.$ )、「心理社会的同一性」( $t(481) = .86$ )

**Table 2** 多次元自我同一性尺度の因子分析結果と因子間相関

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
因子 I 自己斉一性・連続性 ( $\alpha = .88$ )				
いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。*	.80	.04	.00	-.03
過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする。*	.78	-.04	-.09	.11
過去において自分をなくしてしまったように感じる。*	.77	.05	-.04	-.03
今のままでは次第に自分を失ってってしまうような気がする。*	.72	.03	.03	.04
「自分がない」と感じることもある。*	.68	.05	.14	-.10
因子 II 対他的同一性 ( $\alpha = .85$ )				
人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。*	-.07	.87	.05	-.09
自分のまわりの人々は、本当の私をわかってないと思う。*	.06	.68	-.02	-.02
人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。*	.15	.66	-.03	.06
本当の自分は人に理解されないだろう。*	.14	.63	-.04	.08
因子 III 対自的同一性 ( $\alpha = .86$ )				
自分がどうなりたいのかははっきりしている。	.01	.00	.89	-.05
自分が望んでいることがはっきりしている。	.03	-.03	.83	.00
自分のすべきことがはっきりしている。	-.02	.03	.69	.14
因子 IV 心理社会的同一性 ( $\alpha = .68$ )				
現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	-.10	.06	.15	.72
現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	.10	-.08	.05	.60

※\*は逆転項目である。

因子間相関	因子 II	因子 III	因子 IV
因子 I	.70	.24	.25
因子 II		.10	.16
因子 III			.62

**Table 3** 各尺度の男女別平均値と *t* 検定結果

	全体		男性		女性		<i>t</i> 値
	<i>N</i> = 483		<i>N</i> = 210		<i>N</i> = 273		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
同性友人とのつきあい方尺度							
被愛願望	3.29	.92	3.24	.94	3.32	.90	-1.03
自己自信	3.15	.95	3.29	.94	3.05	.95	2.76**
積極的相互理解	3.22	.90	3.30	.98	3.17	.84	1.54
防衛的	2.84	.92	2.76	.92	2.90	.93	-1.70
多次元自我同一性尺度							
自己斉一性・連続性	4.49	1.43	4.62	1.44	4.39	1.41	1.76
対他的同一性	4.10	1.35	4.17	1.35	4.05	1.34	.96
対自的同一性	3.94	1.48	4.01	1.60	3.88	1.39	.96
心理社会的同一性	3.81	1.30	3.86	1.38	3.76	1.24	.86

*n.s.*) 全ての因子において有意な性差はみられなかった。

**交際経験の有無による各尺度の有意差**

交際経験の有無によって各尺度の各因子平均値

の差が有意であるかを検討するために対応のない *t* 検定を行った (Table 4)。同性友人とのつきあい方尺度では、「被愛願望」( $t(295) = .52, n.s.$ )、「自己自信」( $t(295) = 1.38, n.s.$ ) は交際経験あり群と交際経験なし群に有意差はみられず、「積極

Table 4 交際経験の有無による各尺度の *t* 検定結果

	交際経験あり群		群交際経験なし群		<i>t</i> 値
	<i>N</i> = 157		<i>N</i> = 140		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
同性友人とのつきあい方尺度					
被愛願望	3.30	.91	3.24	.91	.52
自己自信	3.29	.97	3.14	.93	1.38
積極的相互理解	3.47	.95	3.04	.85	4.16**
防衛的	2.75	.97	3.05	.87	-2.81**
多次元自我同一性尺度					
自己斉一性・連続性	4.55	1.44	4.36	1.46	1.10
対他的同一性	4.19	1.28	3.91	1.41	1.83
対自的同一性	4.19	1.55	3.74	1.47	2.59**
心理社会的同一性	4.05	1.29	3.44	1.25	4.14**

的相互理解」( $t(293) = 4.16, p < .01$ ) は交際経験あり群の方が交際経験なし群よりも有意に高く、「防衛的」( $t(295) = -2.81, p < .01$ ) は交際経験なし群の方が交際経験あり群よりも有意に高かった。多次元自我同一性尺度では、「自己斉一性・連続性」( $t(295) = 1.10, n.s.$ )、「対他的同一性」( $t(295) = 1.83, n.s.$ ) は両群に有意差はみられず、「対自的同一性」( $t(294) = 2.59, p < .05$ )、「心理社会的同一性」( $t(293) = 4.00, p < .01$ ) は交際経験あり群の方が交際経験なし群よりも有意に高かった。

恋愛の各群による同性友人関係とアイデンティティ

(1) 群分け 恋人がいる青年を恋愛群、恋人がいないと欲しいと思っている青年を恋愛希求群、恋人がいないと欲しいと思わない青年を恋愛不要群の3群に群分けし、交際経験の有無をかけあわせて、恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)、恋愛希求群(交際経験なし)、恋愛不要群(交際経験あり)、恋愛不要群(交際経験なし)の5群に群分け

した。各群の人数を男女別に集計したものをTable 5に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りが有意であった( $\chi^2(4) = 10.43, p < .05$ )。恋愛群では女性の割合の方が男性の割合よりも多く、恋愛希求群(交際経験あり)では、男性の割合が女性の割合よりも多かったが、恋愛希求群(交際経験なし群)、恋愛不要群では男女で人数の偏りはみられなかった。

(2) 恋愛5群と性別による同性友人関係とアイデンティティ 同性友人とのつきあい方尺度4因子得点と多次元自我同一性尺度4因子得点について、恋愛5群と性の2要因の分散分析を行った(Table 6)。その結果、同性友人とのつきあい方尺度の「被愛願望」( $F(4,473) = 2.25, p < .10$ )、「自己自信」( $F(4,473) = 2.19, p < .10$ )、「積極的相互理解」( $F(4,473) = 2.34, p < .10$ )において、恋愛5群と性の交互作用が有意であった。Bonferroni法による単純主効果の検定を行ったところ、「被愛願望」は恋愛不要群(交際経験なし)が女性の方が男性よりも有意に高かった。「自己自信」は

Table 5 恋愛群5群×性別のクロス集計表

	恋愛群	恋愛希求群 (交際経験あり)	恋愛希求群 (交際経験なし)	恋愛不要群 (交際経験あり)	恋愛不要群 (交際経験なし)	全体
男性	65 (13.5)	62 (12.8)	43 ( 8.9)	19 (3.9)	21 (4.3)	210 (100.0)
女性	121 (25.1)	56 (11.6)	48 ( 9.9)	20 (4.1)	28 (5.8)	273 (100.0)
全体	186 (38.5)	118 (24.4)	91 (18.8)	39 (8.1)	49(10.1)	483 (100.0)

※各セルは人数(%)である。また、人数の偏りが有意に多いセルは太線で囲み、有意に少ないセルは破線で囲った。

Table 6 同性友人とのつきあい方と多次元自我同一性における恋愛5群(5)×性(2)の2要因分散分析結果

		恋愛5群					F値		
		①恋愛群	②恋愛希求群 (交際経験あり)	③恋愛希求群 (交際経験なし)	④恋愛不要群 (交際経験あり)	⑤恋愛不要群 (交際経験なし)	恋愛5群 (4,473)	性 (1,473)	交互作用 (4,473)
同性友人とのつきあい方	被愛願望						3.77**	1.19	2.25†
	男性	3.27 (0.93)	3.26 (0.96)	3.53 (0.86)	3.11 (0.90)	2.60 (0.83)			
	女性	3.34 (0.94)	3.52 (0.82)	3.28 (0.80)	2.95 (0.87)	3.20 (1.00)		⑤<②,③	
	全体	3.32 (0.94)	3.38 (0.90)	3.40 (0.84)	3.03 (0.88)	2.95 (0.97)		男性:⑤<①,②,③	⑤:男性<女性
	自己自信						1.48	2.33	2.19†
	男性	3.19 (0.87)	3.48 (1.00)	3.16 (0.86)	3.63 (1.02)	2.94 (0.88)			
	女性	2.95 (0.97)	2.98 (0.84)	3.09 (0.94)	3.27 (0.98)	3.35 (1.03)			②:女性<男性
	全体	3.04 (0.94)	3.24 (0.96)	3.12 (0.90)	3.44 (1.00)	3.17 (0.98)			
	積極的相互理解						5.59**	0.47	2.34†
	男性	3.10 (0.95)	3.70 (0.97)	3.24 (0.88)	3.44 (0.98)	2.70 (0.82)			
	女性	3.18 (0.81)	3.29 (0.88)	2.98 (0.74)	3.35 (0.95)	3.06 (0.96)			男性:①,⑤<②
	全体	3.15 (0.86)	3.50 (0.95)	3.10 (0.81)	3.39 (0.95)	2.91 (0.91)			②:女性<男性
	防衛的						3.33*	1.64	0.51
	男性	2.58 (0.82)	2.65 (1.03)	2.98 (0.75)	2.70 (1.02)	3.19 (0.89)			
	女性	2.85 (0.93)	2.79 (0.90)	3.00 (0.86)	2.98 (0.91)	3.12 (1.07)			①<⑤
全体	2.76 (0.90)	2.71 (0.97)	2.99 (0.80)	2.85 (0.97)	3.15 (0.99)				
自己斉一性・連続性						1.81	2.90†	3.41**	
男性	4.74 (1.38)	4.80 (1.56)	3.95 (1.35)	5.31 (1.08)	4.51 (1.35)			男性:③<①,②,④	
女性	4.44 (1.40)	4.12 (1.35)	4.43 (1.41)	4.25 (1.22)	4.79 (1.68)			②:女性<男性	
全体	4.54 (1.40)	4.48 (1.49)	4.20 (1.40)	4.76 (1.26)	4.67 (1.54)			④:女性<男性	
对他的同一性						1.49	1.24	2.69*	
男性	4.35 (1.30)	4.38 (1.35)	3.59 (1.24)	4.32 (1.25)	4.00 (1.54)				
女性	4.06 (1.36)	4.13 (1.21)	4.27 (1.26)	3.68 (1.18)	3.71 (1.68)			男性:③<①,②	
全体	4.16 (1.35)	4.26 (1.29)	3.95 (1.29)	3.99 (1.24)	3.83 (1.61)			③:男性<女性	
対自的同一性						2.01†	0.32	3.64**	
男性	3.88 (1.45)	4.52 (1.67)	3.55 (1.56)	4.63 (1.49)	3.30 (1.47)			男性:③,⑤<②	
女性	3.87 (1.40)	3.85 (1.47)	3.83 (1.33)	3.70 (1.13)	4.19 (1.52)			②:女性<男性	
全体	3.87 (1.41)	4.21 (1.61)	3.70 (1.44)	4.15 (1.38)	3.81 (1.55)			④:女性<男性	
								⑤:男性<女性	
心理社会的同一性						5.04**	0.08	0.82	
男性	4.00 (1.28)	4.26 (1.34)	3.38 (1.28)	3.95 (1.56)	3.19 (1.36)				
女性	3.81 (1.30)	3.97 (1.12)	3.54 (1.23)	3.73 (1.28)	3.54 (1.18)			男性:③,⑤<②	
全体	3.88 (1.29)	4.12 (1.24)	3.47 (1.25)	3.83 (1.41)	3.39 (1.26)				

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

※ 多重比較の略称は、①=恋愛群、②=恋愛希求群(交際経験あり)、③=恋愛希求群(交際経験なし)、④=恋愛不要群(交際経験あり)、⑤=恋愛不要群(交際経験なし)、をそれぞれ意味する。

恋愛希求群(交際経験あり)が男性の方が女性よりも有意に高かった。「積極的相互理解」は恋愛不要群(交際経験なし)が女性の方が男性よりも有意に高かった。また、多次元自我同一性尺度の「自己斉一性・連続性」( $F(4,473) = 3.41, p<.01$ )、「对他的同一性」( $F(4,473) = 2.69, p<.05$ )、「対自的同一性」( $F(4,473) = 3.64, p<.01$ )において、恋愛5群と性の交互作用が有意であった。Bonferroni法による単純主効果の検定を行ったところ、「自己斉一性・連続性」は恋愛希求群(交際経験あり)と恋愛不要群(交際経験あり)が男性の方が女性よりも有意に高かった。「对他的同一性」は恋愛希求群(交際経験なし)が女性の方が男性

よりも有意に高かった。「対自的同一性」は、恋愛希求群(交際経験あり)と恋愛不要群(交際経験あり)が男性の方が女性よりも有意に高く、恋愛不要群(交際経験なし)が女性の方が男性よりも有意に高かった。また、同性友人とのつきあい方尺度の「被愛願望」得点( $F(4,205) = 3.80, p<.01$ )、「自己自信」得点( $F(4,205) = 2.43, p<.05$ )、「積極的相互理解」得点( $F(4,203) = 5.73, p<.01$ )、「防衛的」得点( $F(4,205) = 2.75, p<.05$ )、多次元自我同一性尺度の「自己斉一性・連続性」得点( $F(4,205) = 3.98, p<.01$ )、「对他的同一性」得点( $F(4,205) = 2.87, p<.01$ )、「対自的同一性」得点( $F(4,205) = 4.59, p<.01$ )、「心理社会的同

一性」得点 ( $F(4,205) = 4.27, p < .01$ ) 全ての得点において、男性のみ性の要因の主効果がみられた。Tukey法による多重比較の結果、同性友人との付き合い方尺度の「被愛願望」得点は、恋愛不要群(交際経験なし)が恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)と恋愛希求群(交際経験なし)よりも有意に低かった。「積極的相互理解」得点は、恋愛希求群(交際経験あり)が恋愛群、恋愛不要群(交際経験なし)よりも有意に高かった。「自己自信」得点と「防衛的」得点は有意差はみられなかった。多次元自我同一性尺度の「自己斉一性・連続性」得点は、恋愛希求群(交際経験なし)が恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)、恋愛不要群(交際経験あり)よりも有意に低かった。「対他的同一性」得点は、恋愛希求群(交際経験なし)が恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)よりも有意に低かった。「対自的同一性」得点は、恋愛希求群(交際経験なし)と恋愛不要群(交際経験なし)が恋愛希求群(交際経験あり)よりも有意に低かった。「心理社会的同一性」得点は、恋愛希求群(交際経験なし)と恋愛不要群(交際経験なし)が恋愛希求群(交際経験あり)よりも有意に低かった。一方、女性は要因の主効果はみられなかった。

## 考 察

### 恋愛の各群における同性友人関係とアイデンティティ

恋愛5群と性を要因とした2要因の分散分析を行ったところ、男性の恋愛群は、恋愛不要群(交際経験なし)よりも同性友人との「被愛願望」が高く、恋愛希求群(交際経験あり)よりも「積極的相互理解」が低く、恋愛希求群(交際経験なし)よりも多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」、「対他的同一性」が高いことが示された。したがって、仮説1：男性の恋愛群は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「積極的相互理解」は高いが、同性友人とのつきあい方の「防衛的」は低く、アイデンティティの確立の程度も高い、は部分的に支持された。つまり、男性の恋愛群は、同性友人から好かれ理解されたいと思う傾向があるが、同性友人との積極的な関わりをする傾向は低く、アイデンティティの確立の程度が比較

的高いことが示唆された。同性友人とのつきあい方の「積極的相互理解」が低かった理由としては、現在恋人がいる男子青年にとって親密な関係を築く対象は同性友人ではなく、恋愛関係である恋人であることが考えられる。すなわち、恋人がいる男子青年は、同性友人との間で親密な関係を築くよりも、恋人との間で親密な関係を築くことを重視していると推察される。

男性の恋愛希求群(交際経験あり)は、恋愛不要群(交際経験なし)よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が高く、恋愛群と恋愛不要群(交際経験なし)よりも「積極的相互理解」が高く、恋愛希求群(交際経験なし)よりも多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」、「対他的同一性」が高く、恋愛希求群(交際経験なし)と恋愛不要群(交際経験なし)よりも多次元自我同一性の「対自的同一性」、「心理社会的同一性」が高いことが示された。したがって、仮説2：男性の恋愛希求群(交際経験あり)は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「全方向的」、「被愛願望」、「積極的相互理解」が高く、アイデンティティの確立の程度は恋愛不要群よりも高い、は概ね支持された。つまり、交際経験があり現在恋人がいなくて恋人が欲しいと思っている男子青年は、同性友人から好かれ理解されたいという思いを抱いており、同性友人と積極的に関わり、アイデンティティの確立の程度が高いことが示唆された。

男性の恋愛希求群(交際経験なし)は、恋愛不要群(交際経験なし)よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が高く、恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)、恋愛不要群(交際経験あり)よりも多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」が低く、恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)よりも「対他的同一性」が低く、恋愛希求群(交際経験あり)よりも「対自的同一性」、「心理社会的同一性」が低いことが示された。したがって、仮説3：男性の恋愛希求群(交際経験なし)は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が高く、アイデンティティの「対自的同一性」、「心理社会的同一性」は低い、は概ね支持された。他群と比較し、アイデンティティの各側面全てにおいて確立の程度が低かったことから、交際経験がなく恋人が欲しいと思っている男子青年は、交際経験がないため異性との間で築かれる親

密性が獲得されておらず、自分に自信がなく自尊心も低いことが推察される(飛田, 1989)。

男性の恋愛不要群(交際経験あり)は、他群と比較して同性友人とのつきあい方に差はみられなかったが、恋愛希求群(交際経験なし)よりも、多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」の確立の程度が高いことが示された。したがって、仮説4: 男性の恋愛不要群(交際経験あり)は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「同調的」「全方向的」「被愛願望」「積極的相互理解」が低く、アイデンティティの確立の程度は恋愛群および恋愛希求群(交際経験あり)よりも低い、は支持されなかった。男性の恋愛不要群(交際経験あり)の同性友人とのつきあい方の「自己自信」「積極的相互理解」得点は理論的中間点以上であり、「防衛的」得点は理論的中間点以下であった。男性は別れを経験した者の方が、対人的に積極的で他人への関心が強く、親和欲求も高く自立的な欲求も強いとされている(大坊, 1988b)。つまり、交際経験があることで親密性を獲得していると推察され、同性友人に対しても本音を出し積極的に関わるつきあい方につながっていると示唆される。また、多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」が理論的中間点以上であることから、恋愛不要群(交際経験あり)は、アイデンティティの確立の程度の高さが示された。友人と積極的に深い関係性を築こうとする青年はアイデンティティの確立の程度が高いことが明らかにされているように(安井・谷, 2008; 松下・吉田, 2009; 堀岡, 2010)、本研究の結果からも先行研究と同様のことが確認された。また、恋愛関係を築くことで親密性が獲得されると、友人と安定的な関わりが持てるようになると示唆されているように(多川, 2003)、男子青年にとって親密性が獲得されているか否かという視点は、同性友人との関わり方やアイデンティティの確立の程度に繋がることが示唆された。

男性の恋愛不要群(交際経験なし)は、恋愛群、恋愛希求群(交際経験あり)、恋愛希求群(交際経験なし)よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が低く、恋愛希求群(交際経験あり)よりも「積極的相互理解」が低く、恋愛希求群(交際経験あり)よりも多次元自我同一性の「対自的同一性」「心理社会的同一性」の確立の程度が低い

ことが示された。したがって、仮説5: 男性の恋愛不要群(交際経験なし)は、他群よりも同性友人とのつきあい方の「被愛願望」「積極的相互理解」「全方向的」「自己自信」が低く、同性友人とのつきあい方の「防衛的」が高く、アイデンティティの確立の程度も低い、は一部支持された。他群と比較して、同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「防衛的」に有意差はみられなかったが、恋愛不要群(交際経験なし)の「自己自信」は理論的中間点(3.0)を下回っており、「防衛的」は理論的中間点(3.0)を上回っていることを考慮すると、「自己自信」なつきあい方をあまりせず、「防衛的」なつきあい方をしていることも推察できるため、慎重な検討が必要であると示唆される。

女性の恋愛各群においては、同性友人関係とアイデンティティの確立の程度に有意差はみられなかった。したがって、仮説6: 女性の恋愛5群において、同性友人とのつきあい方とアイデンティティの確立の程度に群間差はみられない、は支持された。

一方、交際経験の有無および性差によって、同性友人とのつきあい方やアイデンティティの確立の程度が異なることも明らかとなった。同性友人とのつきあい方尺度の「被愛願望」は、恋愛不要群(交際経験なし)において女性の方が男性よりも高かった。また、「自己自信」と「積極的相互理解」は、恋愛希求群(交際経験あり)において、男性の方が女性よりも高かった。また、多次元自我同一性尺度の「自己斉一性・連続性」は、恋愛希求群(交際経験あり)と恋愛不要群(交際経験あり)において、男性の方が女性よりも高かった。「対他的同一性」は、恋愛希求群(交際経験なし)において、女性の方が男性よりも高かった。「対自的同一性」は、恋愛希求群(交際経験あり)において男性の方が女性よりも高く、恋愛不要群(交際経験あり)において男性の方が女性よりも得点は高く、恋愛不要群(交際経験なし)において女性の方が男性よりも高かった。つまり、交際経験がある群において、男性は女性よりも同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「積極的相互理解」が高く、多次元自我同一性の「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」が高いことが示された。一方、交際経験がない群において、女性は男性より

も同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が高く、多次元自我同一性の「対自的同一性」が高いことが示された。したがって、仮説7：交際経験がある群においては、男性は女性よりも同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「積極的相互理解」は高く、アイデンティティの確立の程度も高い。一方、交際経験がない群においては、女性は男性よりも同性友人とのつきあい方の「自己自信」と「積極的相互理解」は高く、アイデンティティの確立の程度も高い、は概ね支持された。同性友人とのつきあい方の「被愛願望」が、恋愛不要群（交際経験なし）において性差がみられた理由として、2点考えられる。1点目は、佐藤（1993）が示しているように女性は対人関係全般において親密な傾向を求めることが背景にあると考えられる。そのため、恋愛を不要と思っていても、同性友人に対して親密な関係を築こうとする関わり方が結果に反映されたと推察される。2点目は、恋愛関係の影響を男性の方が受けやすいことが背景にあると考えられる。交際経験がない男子青年は交際経験がある男子青年と比較すると、自分に自信を持っておらず他者に対する信頼感が低いことが示唆されている（飛田，1989；天谷，2007）。また、男性では、恋愛群の自尊心得点が最も高く、未経験群が最も低いことが示されている一方、女性では、未経験群の自尊心が最も高く群間差は小さいことが示されている（飛田，1989）。また、男性では、交際経験を通して親和欲求が高くなることが示されている（大坊，1988b）。つまり、男性の方が女性よりも恋愛関係を築くことで、自信をもつようになり他者との積極的な関わりがみられるようになるなど、ポジティブな効果を得ることが推察される。

以上のように本研究の結果から、青年期における恋愛は同性友人とのつきあい方とアイデンティティ形成に対して、男女で異なる影響を及ぼすことが示された。つまり、男性の方が女性よりも、恋愛関係をもつことにより同性友人関係を良好に保ち、アイデンティティ形成が高まることが示唆される。

この結果は、Erikson（1968）によって提唱されている青年期におけるアイデンティティの確立の程度と親密性の達成との関連に性差がみられることを裏付けるものであると考えられる。女性は対

人関係全般に親密な関係性を築いている傾向が高いため（佐藤，1993）、恋愛関係で親密性を築いていなくとも、同性友人との関係において親密な関係を築いていることが示唆される。本研究から、青年期のアイデンティティの確立の程度については、親密性の対処の性差が大きく関わることが明らかとなった。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と課題について、2点挙げる。第1に、本研究のサンプル数の少なさがあげられる。恋人の有無、恋愛の希求および交際経験の有無に基づいて5群に分類し、さらに男性と女性に分けた結果、1つの群が20名ほどの少人数となってしまう。今後は、より多くのサンプル数での各群の同性友人関係とアイデンティティとの関連について検討することが求められる。

第2に、本研究では恋愛の要因と同性友人関係、アイデンティティの関連について検討したが、これらの因果関係については明らかにすることはできていない。因果関係を明らかにするためには、さらなる検討が必要であると考えられる。

## 引用文献

- 天谷祐子（2007）. 恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動—大学生を対象として—東海学園大学研究紀要, 12, 17-31.
- 大坊郁夫（1988b）. 異性間の関係崩壊についての認知的研究—日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 64-65.
- 堀岡園子（2010）. 青年の友人関係および集団活動への関わり方と自我同一性との関連—北星学園大学大学院論集, 1, 85-97.
- 川本哲也（2015）. 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連：養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して. 発達心理学研究, 26, 210-224.
- 高坂康雅（2011）. “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討—青年心理学研究, 23, 147-158.

- 高坂康雅 (2016). 恋愛心理学特論—恋愛する青年／しない青年の読み解き方 福島出版.
- 高坂康雅 (2018). 青年期・成人期前期における恋人を欲しいと思わない者のコミュニケーションに対する自信と同性友人関係 青年心理学研究, 29, 107-121.
- 松下姫歌・吉田美悠紀 (2007). 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, 56, 161-169.
- 松下姫歌・吉田 愛 (2009). 大学生における友人関係と自我同一性との関連. 広島大学心理学研究, 9, 207-216.
- 内閣府 (編) (2015). 平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書 (全体版) Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/index.html> (2019年12月16日)
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 落合良行 (1998). 友人関係の拡がり 落合良行 (編) 中学三年生の心理：自分の人生のはじまり (pp.130-157) 大日本図書.
- 佐藤朗子 (1993). 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 40, 215-226.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究—対人関係観に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 50, 251-267.
- 高橋裕行 (1990). 「親密性地位」の検討と同一性地位と親密性地位との連関における性差の検討 教育心理学研究, 38, 240-250.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 飛田 操 (1989). 親密な対人関係の崩壊過程に関する研究 福島大学教育学部論集, 46 (教育・心理部門), 47-55.
- 安井圭一・谷 冬彦 (2008). 現代青年の友人関係と自我同一性との関連 日本パーソナリティ心理学会第17回大会発表論文集, 212-213.

## 付 記

本論文は、2020年度昭和女子大学生生活機構研究科心理学専攻の修士論文「青年期における恋愛および同性友人とアイデンティティの関連」の一部を加筆・修正したものである。

---

たけい しづは (小田原児童相談所)  
 しまたに まきこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)